

# 外国籍の子の学び 誰が支える

保護者の就労などが理由で、日本に移り住む外国籍の子どもが増えている。ただ、高校受験などの負担は大きく、日本語学習や進学への支援はNPOなど民間任せになっているのが現状だ。

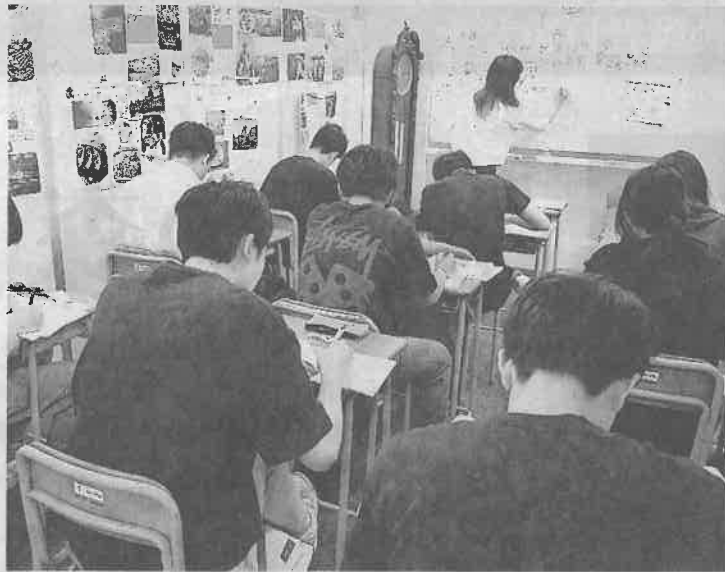
(石川順里)



## 日本語学習・進学相談：民間任せ

6月末、文京区の東洋大に、外国にルーツを持つ10代の子どもや保護者らが集まっていた。認定NPO法人「多文化共生センター東京」が主催する、多言語での高校進学ガイダンスだ。

中国語、タガログ語、英語、タイ語、ネパール語で、高校入試の種類や願書の書き方などの説明があり、参加者は熱心にメモをとっていた。



「たぶんかフリースクール」で日本語を学ぶ外国にルーツがある若者たち＝6月3日、荒川区荒川3丁目

台東区から中学2年の娘と来た中国籍の女性(50)は「高校のことをどこに聞けば良いかわからなかった」と話す。両親に娘を預けて10年ほど前に来日したが、今年1月、日本に呼び寄せた。中国の教育の過熱ぶりに「精神的に良くない」と思っている決断だったが、区立に通う娘は日本語に苦勞し、帰宅するとベッドに倒れ込むほど疲れてしまうという。

同センターは、高校受験を目指す子どもたち向けの日本語教室「たぶんかフリースクール」も開いている。

6月上旬、荒川区のマシヨンの一室であった授業で、講師が「この電話は小さくて〇〇です。当てはまる言葉は？」と問いかけた。生徒から「便利」などと声があがる。講師は一人一人のノートを確認し、「『小さくて』ではなく『小さく』です」となど声をかけて回った。

インドネシアやネパールなど、さまざまな国籍の15～19歳が通う。5年ほど前にイランから来日したという女性(16)は、中学の授業についていくのが難しかった。「ここは同じような人たちがいて、いろいろ話せて楽しい」と笑顔を見せた。

1年かけて日本語を学び、日本語が英語での作文と面接で選考される「在京外国人生徒等対象

選抜」(在京外国人生徒)がある都立高校を受験する生徒が多いという。

「たぶんか」は杉並にもあり、昨年は同校合わせて70人ほどが通い、約50人が高校に進学した。月謝は8月が2万4500円、それ以外の月は3万5500円。主な対象は義務教育を終えた15歳以上だが、不登校になったという中学生のニーズも高まっている。ただ、外国にルーツを持つ子どもたちが急増しており、場所や人材も足りず、学びにつながらない子どもたちが増えているという。

増え続けるニーズ 応える仕組み・予算必要

## 増え続けるニーズ 応える仕組み・予算必要

出入国在留管理庁によると、在留外国人は全国で約376万9千人(2024年末現在)で、前年同期より約35万8千人増え、過去最高を更新した。都立高の外国籍生徒数も増えており、都教育委員会の公立学校統計調査報告書によると、24年度は前年度比145人増の1691人だった(5月1日時点)。

ニーズの高まりで不合格者が増えた現状を受けて、都教委は今春、在京外国人枠を拡大。全日制8校160人だった募集を、新たに昼夜間の定時

制4校を加えた12校240人に増やした。しかし、同センター理事・教育事業担当の鈴木典子さん(73)は「高校進学を望む子どもたちへの学習支援や情報提供は20年以上前から、民間が実施してきた。子どもたちのためにも民間と行政の連携が急務だ」と指摘する。

外国籍の子どもは、義務教育への就学義務はないが、国際人権規約などを踏まえ、日本国籍の子どもと同じように無償で就学できる。ただ、日本語教育のフォローが不十分で不登校になったり、

高校受験に対応できる日本語習得が困難だったり、課題は多い。行政も対策はしているが、ニーズに追いついていないのが現状だ。

鈴木さんは「外国人を単なる『労働力』として見るのは間違っている。雇用する企業も、行政も、国籍を問わず子どもたちが日本で安心して暮らせるようにしていく根を下ろし、社会を支え、ともに地域を担う若者たちを、もっと大切に

## 高校受験で苦勞 次は助ける側に

高校進学ガイダンスで中国語の通訳ボランティアをしていた東洋大4年の林斌さんも「たぶんか」で日本語を学び、高校に進学した。

2018年夏、日本で働いていた母を追って、中学卒業後に中国から来日した。教員になるのが夢で、まずは高校受験をしようとしたが、困難ばかりだった。

日本語がほとんど分からず、家に2カ月ほど引きこもった。知人の紹介で同センターに通い始め、在京外



林斌さん(左端)と、かつて一緒に日本語を学んだ外国にルーツの友人たち＝6月29日、文京区白山5丁目

国人枠という仕組みがあることを初めて知った。

同センターで毎日のように面接や作文の指導を受けた。「原稿用紙の書き方からスタートした」が、努力が実り、都立高に合格した。「センターの人たちが本当に丁寧に教えてくれたおかげ」と感謝する。「経験をいかして、将来は私のように困っている子どもたちを手助けしたい」